

2024年度

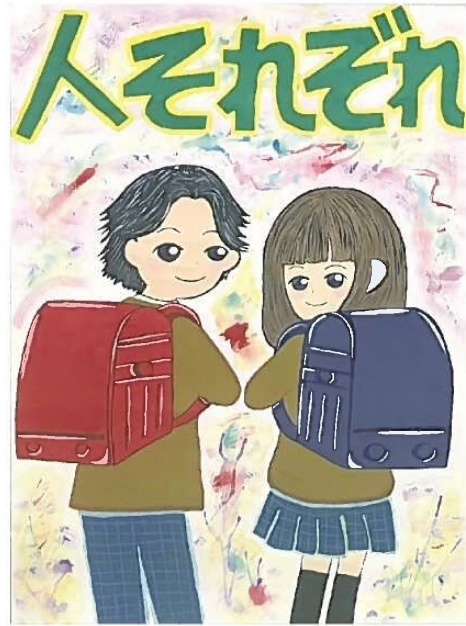
人権作品集

当たり前

みんながみんな

そうじゃない

「人権」に関する標語選定作品 小学六年生



人権に関するポスター選定作品

中学3年生



人権に関するポスター選定作品

小学6年生

「ふざけてた」

相手にとっては

いじめじゃない？

「人権」に関する標語選定作品 中学二年生

はじめに

名張市・名張市教育委員会・名張市人権啓発まちづくり事業推進会議では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや、社会に残る様々な差別や不合理な偏見をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を、市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学生・中学生・高校生をはじめ市民のみなさまから、作文・標語・図画・ポスター・メッセージの作品を、合わせて一〇、三五八点ご応募いただきました。たいへん多くの方々に、人権作品にお取り組みいただきました。ありがとうございました。

ご提出いただいた作品の中には、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、そして学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられているものや、自分自身を振り返り、差別をなくしていくとする姿勢や意欲が伝わってくるものが数多く見られました。

この作品集は、ご応募いただいた作品の中から、作文十作品、標語十三作品、メッセージ五作品、図画・ポスター二十作品を選定し、掲載しています。本誌を、人権について考えるきっかけとするとともに、さまざまな学習の場でご活用いただければ幸いです。

なお、これらの作品の中から、図画・ポスターの一作品、標語の一作品を人権啓発用ティッシュに、そして、図画・ポスター八作品、標語五作品、メッセージ一作品を二〇二五年の人権カレンダーのデザインとして活用させていただきます。ありがとうございました。

目次

作文

【小学生の部】

- やさしい友だち
- 友だちとのつながり
- 自分を見つめて気づいたこと
- りんごで学んだ多様性
- 無意識のこわさ
- 言葉のちから
- 給食のときに
- 相手を知ること

学年	ページ
二年生	4
二年生	5
四年生	6
四年生	7
五年生	8
五年生	9
六年生	10
六年生	11

【中学生の部】

○認知症とのつながり

一年生・

○言葉が通じなくても

三年生・

標語

【小学生の部】

・
・
・

【中学生の部】

・
・
・

メッセージ「あなたの大切な人へ」

・
・
・

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

図画・ポスター

【小学生の部】

・
・
・

【中学生の部】

・
・
・

作文【小学生の部】

やさしい友だち

(小学二年生)

ぼくのまわりには、友だちがこまっていたらたすけようとする、やさしい友だちがたくさんいます。

学校の休み時間に、二年生のみんなでドッジボールをしていました。そのときに、外やにいたAくんが、とつぜんなき出してしまいました。ぼくは「Aくん大じょうぶかな。」と思ったけれど、声をかけられず、ただ見ているだけでした。でもまわりの友だちは、

「Aくん大じょうぶやで。」

とやさしく声をかけ、Aくんをなぐさめていました。

「Aくん、なにかあったの。」

と、Aくんの話を聞こうと、声をかけている友だちもいました。話を聞く中で、みんなはAくんにボールがまわってきていなかったことに気づき、

「Aくんにボールわたしてあげや。」

と、やさしく声をかけていました。ボールをもっていた友だちが、すぐにAくんにボールをわたしました。しばらくして、Aくんはなきやみました。その後は、みんなで楽しくドッジボールができたので、ぼくはあんしんしました。

ぼくは、みんながAくんがいないことに気づいて、すぐにかげより、やさしくなぐさめているところが、すごいなと思いました。なぜなら、ぼくは見ていただけし

かできず、声をかけるゆう気がなかったからです。なかのよい友だちでも、しんぱいするだけで、なかなか自分から声をかけられません。それに、みんなはすぐに先生をよぶのではなく、Aくんの話を聞いて、自分たちだけでかいけつしようともしていました。みんなは、かつこよくて、やさしい友だちだと思いました。

まわりの友だちのように、こまっている人がいたら、すぐに声をかけてなぐさめられる人は、やさしくてゆう気のある人だと思います。ぼくもまわりの友だちのように、こまっている人がいたら、だれでもすぐにたすけられる人になりたいと思いました。そのために、見ているだけではなく、まずはゆう気を出して声をかけたいです。さらに、こまっている人の話を聞いて、こまっていることやないでいるりゆうを教えてもらうことも大切だなと思います。そうすることで、あい手の気もちを知り、自分にできることを考えて、たすけることができると思います。

これからは、ゆう気を出して、自分からこまっている人に声をかけたり、こまっている人の話を聞いたりして、友だちやまわりの人をたすけたいです。

友だちとのつながり

(小学二年生)

わたしは、小学校でたくさん友だちをつくって、あそんだり、話をしたりしたいと思ってすごしています。

しかし、ようち園のころはゆう気が出ませんでした。そして、自分から友だちに話しかけることができなくて、一人であることもよくありました。そのときは、「一人であそぶのもいいけど、みんなとあそんだらもっと楽しいのだろうな」と思っていました。

ある日、Aちゃんが一人だったわたしに、
「友だちになろう。」

とやさしく声をかけてくれました。わたしはそのとき、声をかけてもらったことがとてもうれしかったです。そして、わたしは「Aちゃんは自分から友だちに声をかけることができずすごいな」と思いました。

そんなAちゃんとのできごとがあつてからわたしは「Aちゃんみたいに声をかけられるようになりたい」と思うようになりました。

それから、小学校へ入って、一年生になったときに、うんていの近くで同じクラスのBちゃんが一人であそんでいました。わたしはいっしょにあそびたいけど、ドキドキして話しかけるゆう気が出ませんでした。ですが、ようち園のころに、自分が話しかけてもらってうれしかったことを思い出し、ゆう気を出して

「友だちになろう。」

と声をかけました。すると、Bちゃんは

「うん。友だちになろう。」

とえがおで言うてくれました。その時、わたしはとてもうれしくて、あたたかい気持ちになりました。

二年生になってからは、友だちに声をかけることにもなれてきました。そして、ある日わたしは昼休みに一人ですわっているCちゃんに

「いっしょにあそぼう。」

と声をかけました。わたしにとっては、なにげないことばでした。しかし、Cちゃんはじゅぎょうのさく文を書く時間で、そのできごとについて書いていました。そこには、わたしから声をかけられてうれしかったことや、わたしみたいに、声をかけられるようになりたいということが書いてありました。わたしはそれを読んで、うれしい気持ちになりました。わたしはこのできごとから、友だちに声をかけることは、言った方も言われた方もあたたかい気持ちになると気づきました。そして友だちからしてもらってうれしかったことがつながっていくんだと思いました。さいしよはゆう気が出なくて、ドキドキしたけれど、なんども声をかけるうちに、どんどんなれてきました。これからも、友だちに声をかけてみんなでなかよくあそびたいと思います。

自分を見つめて気づいたこと

(小学四年生)

三年生の時、二十分休みに教室で友だちと五十メートル走のタイムの話をしていました。その時、AさんがBさんに、「足がおそい。」

と言って、ばかにしていました。何回も言っていて、Bさんはじつとだまって、なきそうになっていました。何でBさんは何も言わないのか、いやじゃないのかなと思いました。ぼくは、見ているだけでした。

そのあと、BさんはAさんのかかとを上げつでふみました。

Aさんは、

「いった。」

と言って、Bさんの頭をたたきました。ぼくは、Bさんがかわいそうだと思います。足をふんだのはだめだけど、Aさんにばかにされてはらがたっていたんだと思ったからです。

ぼくは初めは見ていただけで、先生や他の友だちにも言えませんでした。止めた方がいいか、このまま見て見ぬふりするか、どっちとまよいました。一、二年生の時は、もし止めようとしたら、自分もAさんに悪口を言われたり、暴力をされたりするかもと思って見て見ぬふりをしていました。でも、この時は、勇気を出して、

「そんなこと言うたらあかんで。」

と、Aさんに言いました。どきどきしたけどAさんは、

「わかった。」

と言って、やめてくれました。Bさんにも、あやまって、ケンカが終わったから安心しました。ぼくは、まよったけど、

「言ってよかったな。」と思いました。ちょっと成長したかなと思えました。

四年生になって、社会の授業中に、先生が職員室にプリントを取りに戻っている間に、ぼくは指示されたことをやらずにおしやべりをしていました。同じ班の友だちが注意してくれたのに、ぼくは無視をして、おしやべりを続けました。すると、友だちが泣き始めました。そこへ先生が戻ってきて、周りの友だちがこのことを先生に伝えました。先生にこの時の様子を聞かれて、初めは自分は何も悪くないと思っていたけど、ふり返りをしているうちに、注意してくれた友だちに悪いことをしたなと反省して、あやまりました。

ぼくがAさんに思い切って注意した時に、言うことを聞いてくれてうれしかったのに、自分は注意してくれた友だちを無視していたから、悪いことをしたなと気がつきました。自分が注意された時に、「何で自分だけに言うの。」と思って、すなおに聞けないことがあります。でも、注意してくれた友だちは、自分のために勇気を出してくれたことを考えなくてはならないなと思います。

これからは、自分がされていやだったことは、相手にしない、してもらってうれしかったことは、自分もできるようにしたいと思います。

りんごで学んだ多様性

(小学四年生)

この前、ゲストティーチャーの上森さんと先生から、「多様性」の話を聞きました。

わたしは、ひとつのりんごを見て思いうかんだことをみんなで伝え合ったことが一番心に残りました。なぜかというと、わたしは、この世の食べ物の中で、りんごが一番きれいだからです。昔のどに比べたり、りんごアメものどに比べたり、本当にそれから大きらいになりました。だから、りんごの絵がモニターにうつったときにみんなが「おいしそう。」とか「かぶりつきたい。」とか言っているのびっくりしました。同じ物を見ても感じ方は人それぞれと分かって、よかったです。

それで、わたしは最近、このお話のふく習をしています。りんごのいいところを考えたり、のどにつまんで、くるしかつたできごとをわすれようとしていたりしています。大きらいなりんごも、いろいろな面から見たら、わたしのイメージとちがうことが見えてくるかもしれません。これは、友だちやまわりの人に対しても同じだと思います。きらいと思ってるばかりではなく、その人のいろいろな面を見ることで、いいところにも気づくかもしれません。それに、感じ方は人それぞれ、人とちがってもいいんだと分かりました。それでりんごの話が一番心に残りました。

それから、上森さんのメッセージも心に残りました。なぜかというと、「人とちがっていい」と言ってくれて、わたしたちのクラスのことを、「人とちがっても自分の考えを自由に

言えるところがいい」と言ってくれました。そのことが心にひびきました。「みんなちがってあたり前」という言葉に、「たしかにな。」とすごくなっとくしました。

わたしも、いろいろと、みんなとちがうことが多いです。りんごの話のように、みんなと感じ方がちがうことがあります。それからクラスのみんなには、「あの子は足がはやい。」「英語が話せる。」など、いろいろちがうとくぎがあります。わたしは、自分で自信をもって「これがとくぎ」と言えるものかと思うかびません。だからわたしは、今まで自分がみんなとちがうことを気にしたり、不安になったりすることがありました。でも、上森さんのメッセージを聞いて、心がほつとしました。わたしはちがっていいことを知ってよかったです。

上森さんの読んでくれた「せかいではじめてズボンをはいた女の子」のメアリーは、大人たちにはやなことを言われても、「わたしは男の子の服を着ているんじゃない。わたしの服を着ているの。」と、どうしようとズボンをはいていました。そして最後に、メアリー以外の女の子もズボンをはいたところが感動しました。自分らしくしているだけなのに、差別されて心がふさがれたり、心の中で泣いたり、わたしもそういうことがよくあるけれど、わたしは、友だちが気持ちを分かってくれたり、支えてくれたりすると、やる気と勇気が出てきます。だから、「みんなちがってあたり前」と思えるようになってうれしかったし、友だちのいいところもいろいろあるって知れてよかったです。

無意識のこわさ

(小学五年生)

「自分は楽しいけど、相手はいや。自分の当たり前は相手にとって『ありえへん!』かも!」

この言葉は、五年生の出会い学習で出会った、林みち子さんの言葉です。私は、この言葉に心がドキッとしました。

私には仲のいい友だちが何人かいます。ある友だちが算数の授業が終わった時に、

「この問題分からん、教えて。」

と言いました。それは私にとつては、とても簡単な問題でした。その時私は、

「そんな簡単な問題も解けへんの?」

と言ってしまった。また、違う日に今度は五人ほどの友だちと遊んでいました。その時は、みんなで集まって色々な話をしていました。その時に、またあの友だちが、

「それってどういうこと?」

と言ってきました。その友だち以外のみんなは、今話している話の意味を理解できていたので、一人だけ分かっていないのが、おかしいと思いました。

私はまた、その友だちに向かって

「そんなことも分からんの?」

と軽い気持ちで言ってしまった。その友だちは何も言いませんでした。実は私は、

「そんなことも分からんの?」

という言葉に傷つき悩んだ時期がありました。その時は、首をしめ付けられたり、水筒カバーを蹴られたり、宿題の算数プリントに絵や間違った答えを書かれたりしました。その時に、いじめてきた人たちに言われた言葉が、

「そんなもん分からへんの?」

という言葉でした。その時はとても悲しく、心が痛くなりました。でも、そ

んな言葉を自分が使ってしまったていました。私はモヤモヤして、私が友だちに、

「そんなことも分からんの?」

と傷つけることを言ってしまったことをお母さんたちに相談しました。お母さんに、

「なんで自分が傷ついた言葉を相手に使ってしまったの?」

と言われ、私は無意識のうちに友だちを見下していたんだと気づきました。その後、お母さんと二人で泣きました。

お母さんに相談してから、私はその友だちに謝りました。友だちは、

「全然大丈夫!ちよつと『ウグッ:』ときただけやから。」

と笑っていましたが、私は全く笑う事ができませんでした。私は友だちを見下してひどいことを言ったのに、その友だちは謝る私を氣にかけてくれました。そして、その友だちの優しさが申し訳なくて、とても苦しくなりました。涙が出そうになりました。

私は、いじめる側、いじめられる側どっちの立場も経験しました。自分よりできることが多いか多くないかで決めつけてしまうのは、とてもひどいことだというのは知っています。ただ、それを何も考えず、すぐに口に出してしまうことが、より友だちを傷つけるということに私は気づきました。自分が言われる立場だった時、とてもつらく悲しい、心に一生治らない傷ができました。でも、自分が言っている立場だった時は、友だちが傷ついていると気づかなければ、心に残らず自分が言ったことは忘れてしまっていたと思います。

無意識のうちに友だちを傷つけないために、友だちの表情を見て自分の使った言葉をふりかえったり、気になる表情の子がいたらその子が言いたくなるまでそばにいてあげたりしたいです。そして、自分がつらい時は誰かに相談できるようにしたいです。こうすることで、自分も友だちも傷つけないくてすむと思います。これからは、どっちの立場にもならないようにしたいと強く思いました。

言葉のちから

(小学五年生)

「一緒に遊ぼう。」「みんな待っているよ。」これは、わたしが一か月ほど学校に行けなくなったときに、友だちや担任の先生がかけてくれた言葉です。この言葉は、今もわたしの心の中に、強く残っています。

わたしはもともと勉強が苦手で、特に算数に苦手意識がありました。三年生のときの算数が難しく、ついていけていないと感じるようになりました。授業中に、自分だけ分かっていないような感覚になったのです。その不安がどんどん大きくなってしまつて、学校に行くのが難しくなりました。学校に行きたい気持ちはありました。でも、不安の方が大きくて、なかなか行くことができませんでした。学校に行っていない間は、家で勉強をしたり、絵を描いたりしてすごしました。そんなわたしにお母さんは、

「無理はしないでいいよ。学校に行きたくなつたそのときは、応えんするよ。」

と言ってくれました。わたしのことを信じてくれている気がして、心強かったです。

一か月ほど家で勉強をしてすごしたけれど、今度はそれがだんだん辛くなってきました。やっぱり、友だちや先生と会って、一緒に勉強したいという気持ちの方が大きくなってきたのです。勉強は一人でするのもいいけれど、友だちと一緒にすることの方が、意味があると思つたからです。

わたしは勇気を出して、学校に行きました。しばらく休んでい

たので、教室に入るときは心臓がとび出しそうなくらいドキドキしました。教室に入って自分の席に座っていると、こんな声が聞こえてきました。

「すみれちゃんつてずる休みしてるんやろ。」

わたしに聞こえるように、目の前でそう言われたときはすごくショックで、すぐにでも帰りたくなりました。でも、別の友だちが、

「すみれちゃん、一緒に遊ぼう。」

と、口々に誘ってくれました。その言葉は、わたしのイライラした気持ちをふっと軽くしてくれました。言葉の力は不思議で、嫌な気持ちにも嬉しい気持ちにもさせるのだなと感じました。

この前出会った藤本佐利さんのお話でも、やっぱりそうかと思つたことがあります。嫌なことを言つたりしたりしたことは、相手の心にずっと傷が残るということです。何をしてもそれは消えません。傷は小さくなることはあつても、消えることはありません。なぜなら、わたしがそうだからです。ずる休みと言われたことは今もずっと心に残っています。言っている方はそんなつもりはないとしても、言われた方は嫌なのです。

でもそれ以上に、わたしを信じていたお母さんの言葉や、友だちの温かい言葉の方が、わたしの心に残っています。まだまだ自信はないけれど、自分を含めたまわりの人が幸せになれるような言葉をつかつていけるようになりたいです。

給食のときに

(小学六年生)

二学期初めての給食。おかずの配膳を担当していたAさんがキョロキョロしていた。その時にAさん以外の当番の子は、自分の仕事を一通り終えて、給食着を脱いでいた。他の子と話をしている子もいた。だけどAさんは周りを見てキョロキョロしている。配っていた手が止まって、なんだか困っているようだった。それを見た自分は、「あ、おかずが足りなくなってる困っているのかな」と思った。すぐに、すでに配られていた物の中から、量が多いものを探して持っていた。けれど他の子は誰も手伝ってはいくれない。全く動かず、友達と喋っている。「気づいていないのか?」「それとも見て見ぬふりをしているのか?」「はやく気づいて持ってきてよ」と思った。だけど自分もただ黙々と配膳された食器を集めて持っていくだけで、「手伝って」とか「ちよつと誰かあ」とか声をかけることはしなかった。「まあ、そのうち他の子も気づくだろう」と思っていた。だからほつといていた。「Aさんが声をかけるかな」と思っていた。だけどそのとき、見かねた先生の声が教室に響いた。

「Aさんは声をかけるのが苦手なんだから、気づいたなら声をかけたり、動いたりするべきじゃないか。」

その時、「私は悪くない」「Aさんも自分から声をかけないのが悪い」「他の子は見て見ぬふりしてるし」「気づかないのも悪い」と思ってしまった。今思い返せば他の子が気づかなかったのは声をかけなかったせいだし、自分が声をかければ済む話だった。なの

にAさんが自分で声をかければいいと思い、声をかけなかった。いろんなことに気づけていなかったのは自分だったと思う。

一学期の人権学習で「それっておかしくない?」と考えること、おかしいことに気づく力が大切だということを教えてもらった。苦手、得意は人それぞれだし、自分ができるからといって他の子ができるとは限らない。自分は当たり前にできることだから他の子もできるやろと決めつけてしまうのはやめようと思う。そういう思い込みは、「いじめ」や「差別」につながると思う。自分は「いじめ」や「差別」はしない、加害者にもならない、と勝手に思い込んでいる。だけど気づかないうちになっているかもしれない。他の子がいじめられているのを見て見ぬふりしたり、気づかなかつたりするのもいじめに加担しているのと同じだということも学んできた。今回のことも、自分はちゃんとやっているつもりだったけれど、本当に相手を気づかったり、協力したり、相手の立場に立って考えたりできていたと言えるのだろうか。Aさんはいじめと感じていたかもしれないし、少なくとも嫌な気持ちにはなっていないんじゃないかと思う。これからはおかしいことに気づくこと、相手の立場に立って考えることを大切にして、自分の考え方や行動をもう一度見つめ直そうと思う。

相手を知ること

(小学六年生)

私は、仲の良い子には優しいけれど、あまり話さない子にはきつく言う人が苦手です。苦手と思うと、自分から声をかけようとしません。低学年のころは、本当に全くその自分を変えようとは思いませんでした。今は少しずつ、その苦手とと思っている子の良いところをみつけたり話しかけたりできるようになりました。それは、弟が学校から帰ってくると、「ぼく、あの子きらいやったけど、こんな良いところあんねん。」と家族に話すのを何度も見たからです。私は、そんな見方ができなかったけど、弟が話しているのを見て、自分を変えてみようという思いができました。

そして、相手と話したり、遊んだりすると、その子らしさが見えてくるのです。誰だって、苦手な子はいます。でも、気にいらないから、自分とちがうから、という理由で、苦手な子と決めつけて、先入観を持ってしまつては、絶対その子とつながることは無いと思います。話をする相手の方がよくわかります。

でも、友達が、その子のことをよく知らずに陰口を言っていた時、注意できなかったり、自分も腹が立っていて苦手と感じている子の悪口を言ってしまったりする時があります。人が言っているのと嫌な気持ちになるので、自分も嫌な気持ちにさせていると思います。言った方はすぐに忘れていますが、聞いていた方は、不愉快な気持ちをずっと覚えています。人の言葉は、簡単に人を傷つけられるし、いやすこともできると両親がよく教えてくれます。言葉一つで、そのつもりがなくても傷つけます。自分の言葉や行動に責任を持ちたいと思います。

私は、夏休みに『魔女だったかもしれないわたし』という本を

読みました。この本は自閉スペクトラム症のアディという女の子が主人公です。自閉スペクトラム症はこだわりが強く対人関係が苦手であると調べたら書いてありました。今は、一人ひとりの子どもに合わせた時間の取り方や勉強方法を学校でできるけど、そんな教育がされなかった時代の話のようでした。アディが図書館に行った時、授業で習った魔女について調べると、人と違うというところで殺されていたことがわかりました。魔女とは、他の人と違うから怖い人という認識で書かれていました。アディは、魔女を自分と重ね合わせて考えました。そして、その人たちの慰霊碑を建てようと街の人たちにたのみました。ですが、街の評判を下げると言って拒否されました。すると、自閉スペクトラム症と魔女と呼ばれた人たちのことを何度も説明しました。その結果、慰霊碑を建てることができました。

私は、その本の「一人ひとり人間は違う。決められたことができない」と、異常と言われる世界で、アディは生きにくいと感じた」という言葉に共感できました。人は自分と同じ意見や考え方だと安心します。しかし、自分と違う人に対しては冷たく接することがあります。そういう違う人を魔女と呼び、自分達だけ安心する社会をつくってはいけません。人を孤立化させたり、差別が当たり前になったりする社会は誰もが生きにくくなります。

私は周りの人の顔をうかがっています。アディのように自分の気持ちを伝えたら、自分をわかってもらえるはずですが、そして、自信がつくでしょう。「相手のことを知る」ことが、つながる一歩だと思っています。決めつけた見方でなく、お互いを受け止め合えるように、これから自分からいろんな人に話しかけたり、おかしいと思ったら意見を言ったりするなどして、少しずつ進んでいきたいです。

作文【中学生の部】

認知症とのつながり

(中学一年生)

日本は今、超高齢化社会になり社会全体の課題となっています。認知症について調べてみると、現在、日本には認知症の人は約六百万人も居ると言われています。どんな人でも一度は認知症の人と関わったことがあるのではないかと思います。昔は「認知症」ではなく「痴呆」と呼ばれていて差別的な意味を含む呼び方でした。二〇〇四年頃「認知症」に改められ、「認知症の人身の意思を尊重する。」ことが大切だと認識され始めました。しかし認知症に対する確実な予防法や治療法は今はまだ発見されてなく、「認知症の人は何もわからない。」「人格が壊れる。」といった間違った認識や差別が今でも多く、人権に関わる多くの問題が存在しているそうです。

なぜ認知症について書くかと思うたかという、私のおじいちゃんが認知症だからです。私は認知症が八十代から九十代の人になるのかなと思っていたけれど、私のおじいちゃんはまだ七十代です。初めにおかしいなと気づいたのは七十歳になる頃でした。

おじいちゃんの家に行った時は、いつもお小遣いを貰うのが楽しみの一つなのですが、なぜか一日に二回も渡してきた時が何度かあり、なぜだろうと思っていました。その頃お母さんから「じいじ、認知症かもしれないね。」と知らされました。その時は、それを聞いてもあまり理解ができませんでした。おじいちゃんは遠くに住んでいるので、年に四、五回ぐらいしか会いに行けないのですが、行くとどんどんお母さんの言った意味がわかってきました。

- ・食べたことを忘れてしまい、一日に何度もご飯を食べようとする。
- ・今まで使っていた物の場所がわからない。
- ・自分の名前、住所を書くことができない。
- ・テレビのリモコンの使い方がわからない。
- ・何をすれば良いかわからない。

- ・トイレに何回も行ってしまう。
 - ・お風呂の入り方がわからなくて入るのを嫌がる。
 - ・好きだったボウリングに行ってもすぐ疲れて帰りがたがる。
- 他にもたくさんありますが、このような行動が、会うたびに目立つようになりまし。介護の仕事をしている私のお母さんはおじいちゃんのことを見て「じいじはまだ若いから認知症が進むのが速い気がするな。」と言っていました。

認知症には、薬でよくなるものや脳の病気やけがによっておこるものなど数種類あるようですが、私のおじいちゃんや脳が萎縮してしまい、薬でもあまり良くはならない種類だと診断されました。病院に行って認知症の診察を受けるまでも、認知症テストを嫌がったり、「自分はまだばけていない。大丈夫。帰る!」と何度か帰ったこともあるとおばあちゃんから聞きました。まだ私たちのことは覚えていますが、会う回数が少ないとどんどん忘れていってしまうと聞き、考えるだけで悲しくなりました。

おじいちゃんの様子を見ていて、一番大変な思いをしているのは一緒に暮らしているおばあちゃんだと思いました。おじいちゃんの動きを常に見ていて、おじいちゃんがどうしたら良いかその都度おばあちゃんが教えてあげていました。おじいちゃんは何度教えてもらってもどうしたら良いかわからなくてイライラしてしまい、おばあちゃんは何度言ってもできないおじいちゃんにイライラしていました。以前お母さんにも聞いたことがあったのですが、介護の仕事をしている時にイライラした経験が何度もあると言っていました。何年も介護の仕事をしていて認知症というものを理解しているお母さんでもそういう思いになってしまうくらい、認知症の人と関わることは難しいことなんだなと思いました。テレビのニュースでたまに聞く、「高齢者虐待」の事件はこういったイライラの積み重ねで起こってしまうのかなと思いました。それなのにおばあちゃん家のことをしながら、朝から夜まで二十四時間おじいちゃんの介護をしています。認知症のおじいちゃんと介護をするおばあちゃんのとちらもがストレスなく普通に生活をおくってほしいです。そのためには、いろいろな人の助けを借りることが大切だと思います。私も、お母さんに認知症のことを教えてもらいながら、おじいちゃんと関わることでこれから先、上手く接することができたら良いなと思います。認知症の人が暮らしやすい社会になるために、誰もが正しい知識を持ってみんな考えていける社会になると良いなと思います。

言葉が通じなくても

(中学三年生)

今、日本に外国人観光客がたくさんいます。コロナ感染拡大前の過去最高の人数に比べると、八割近くの水準まで回復しているそうです。いろんな国から、たくさんのお客さんが来ているので、話す言葉も違えば、文化も違います。なので言葉で通じ合うことはとても難しいと思います。でも言葉ではなく行動したことで思いや考えが分かったことが私にはあります。

一つ目は、京都の嵐山に行ったときです。嵐山には、保津川下りという約十六キロの船旅の観光スポットがあります。船に乗るために、私はトロツコ電車、バスと経由して行きました。トロツコ電車では席は指定席で、私の前の人は一人の外国人観光客でした。トロツコ電車の中では、景色とともに係の人が写真を撮ってくれるというサービスがありました。でも、外国人観光客の方の写真を撮らずに、私のほうへ係の人はまわってきました。外国人観光客の方は、はじめはびっくりしていたけど、だんだんと悲しそうな表情をしていました。なので、私は係の人に言おうと思いましたが、声をかけることもできずモジモジしていました。でも私には一つアイデアが思い浮かびました。それは、私が外国人の方に写真を撮ってあげることです。それを横にすわっていたお母さんに言おうと、「いいよ。」と乗り気で言ってくれました。しかし、英語圏の人じゃないかとか、まちがった英語を言ってしまうと、相手を怒らせてしまうかとも思って、勇気を出せずに、降りる駅についてしまいました。また、英語の文章をお母さんと話しているときにコンソ話のようにしていたのでかえって外国人の方を傷つけていたかもしれないと思います。でも電車を降りるときに、その外国人の方は降りる順番を、小さい子がいる家族にゆずっていました。私はとても感動しました。写真を撮ってもらえなかったのに、自分が傷つけたかもしれないのに、笑顔で小さい子どもが電車を降りるのを見守っていました。私はそれを見てすぐに謝りたくなりました。それになんて素敵な人だろうと思いました。

た。見習おうと思いました。

二つ目は、トロツコ電車の次に乗ったバスでのことです。私がバスに乗ったときには、すでにほぼ満席で一番前の席だけがあいていました。私の後ろに乗ったのは家族四人で日本に来ていた外国人観光客の方たちでした。家族構成は、お父さんとお母さんと子どもの男の子、女の子でした。女の子はとても小さく三才くらいでした。お母さんが女の子のために席を探していましたが、一番前の席があいているということには気づかなかったようです。なので私は、さっきの声をかけられなかった悔しい思いをしないために、指をあいている席に指しながら、「Here」と言いました。そしたら、お母さんが「本当に!!」という顔でこちらを見ました。そして笑顔でお礼をしてくれました。勇気を出して良かったなと思いました。私一人が勇気を出したことによって、私も、お母さんも女の子も笑顔になりました。とてもうれしかったです。

三つ目は、船を降りるときのことでした。船に乗るときにきたライフジャケットを脱いで前に渡してくださいと船頭さんが言いました。私は一番前の席だったので後ろの人からライフジャケットがくるのを待ちました。後ろの人は外国人観光客の方でした。ライフジャケットをもらうときに外国人の方が礼をしながら渡してくれました。顔をよく見ると、トロツコ電車前の席の人でした。相手も私に気付いたのか少し笑顔になってくれました。トロツコ電車で一緒になったのは運があったのかなと思いました。私も外国人の方から、ライフジャケットをもらうときに、笑顔でいいのかとか、声をかけたほうがいいのかと思いました。でも、少しだけの顔見知りだったので私も自然に笑顔になりました。あのときに、写真を撮りましょうかと声をかけていれば、もっと仲が良くなって、会話をしていたかもしれないと思うと、後悔でしかないです。

日本に来た外国人観光客の方が差別されることなく同じあつかいを受けてほしいなと思いました。日本に来て嫌な思いをせずに、来てよかったと思ってもらえるように自分からでもできることを探して行動に移したいと思いました。

標語

【小学生の部】

- ・気づいてよ 拡散すれば 戻れない 五年生
- ・見てるだけ それもいじめに 変わらない 五年生
- ・いじめはね 見て見ぬふりも してる側 五年生
- ・それいいの 書く前 言う前 確認を 五年生
- ・当たり前 みんながみんな そうじゃない 六年生
- ・君を今 大事に思う 人がいる 六年生
- ・とらえ方 みんな違うよ 考えて 六年生
- ・ダメなことは ダメと言える 本当の友達 六年生

【中学生の部】

- ・君の色 誰も持っていない 特別な色 一年生
- ・「ふざけてた」 相手にとっては いじめじゃない？ 二年生
- ・ネットでも 人の心を 大切に 三年生
- ・傷つけないで みんな誰かの 大切な人 三年生
- ・その笑顔 本当の気持ち 隠していない？ 三年生

メッセージ「あなたの大切な人へ」

最優秀賞

「友達」へ

学校ではみんなにいつもすごく感謝してるよ。私の居場所をくれて、毎日何気ない日常を私にプレゼントしてくれるから。優しい言葉をかけて励ましてくれた時もあったね。厳しい言葉をくれる時もあったね。私にはみんながいないと学校に行けなかったと思う。学校に行く理由を教えてくれてありがとう。

(高校1年生)

優秀賞

「心友」へ

元気にしてますか。すごく優しい心をもつ貴方は私に無理するななんて言うけど、貴方が無理しがちなことはよく知っています。他人に優しくするのはいいけど、まず自分に優しくしてください。こんなでも心配してます。貴方と話す時間が1日の最大の楽しみです。いつもありがとう。

(高校1年生)

「ママ」へ

私が人間関係で悩んだとき、どうしようもなく泣く事しかできなかった。でも毎晩話す時間を作ってくれて、ママに話すだけで明日も学校に行ける決心ができました。気持ちを切り替えるのが難しくても、長く待っていてくれて本当に嬉しかったし、感謝しありません。本当にありがとう。

(高校1年生)

「お母さん」へ

3月中旬に病気が分かって目まぐるしく生活が変化したね。今まで元気に過ごせることが当たり前だと思っていた私はお母さんの辛そうな姿を見て、毎日を普通に生きるということがどれだけ有難いことなのかと痛感したよ。お母さんが今まで教えてくれたことを大切に生きるからね。お母さん、本当にありがとう。

(一般)

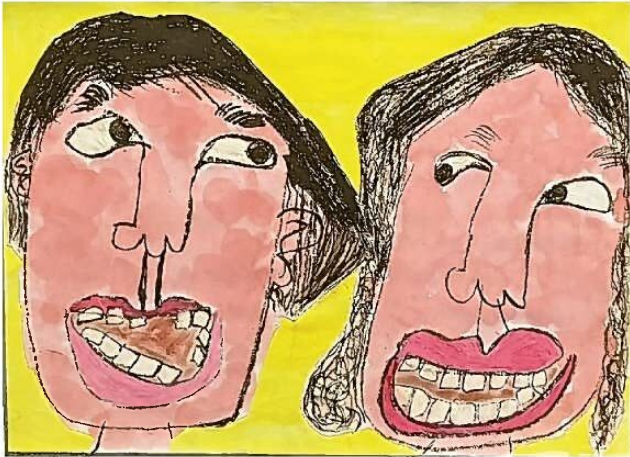
「お父さん」へ

私が今の仕事に就いた時、きっとお父さんは不安と心配があったと思う。でも、私は今、この職に就けて、沢山の人と出会い繋がりを深められているよ。それはお父さんが繋がりを作ってくれたお陰です。いつか「お父さん、私この仕事に就けて幸せだよ。」と伝えられるように頑張るね。いつもありがとう。

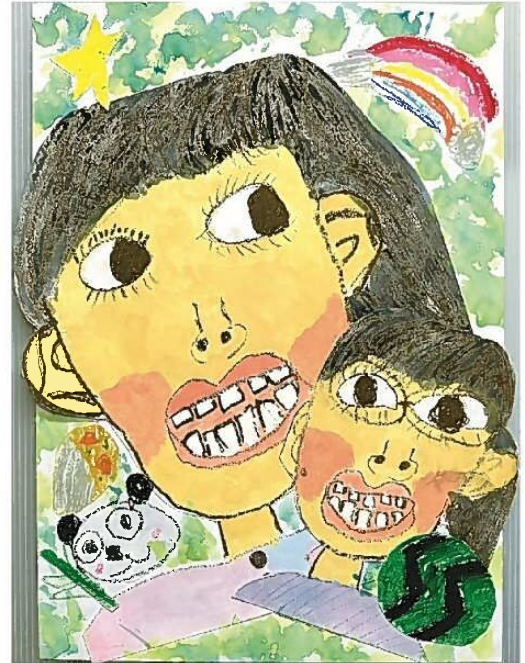
(一般)

図画・ポスター

《小学生の部》



1年生



2年生



1年生



2年生



2年生



3年生



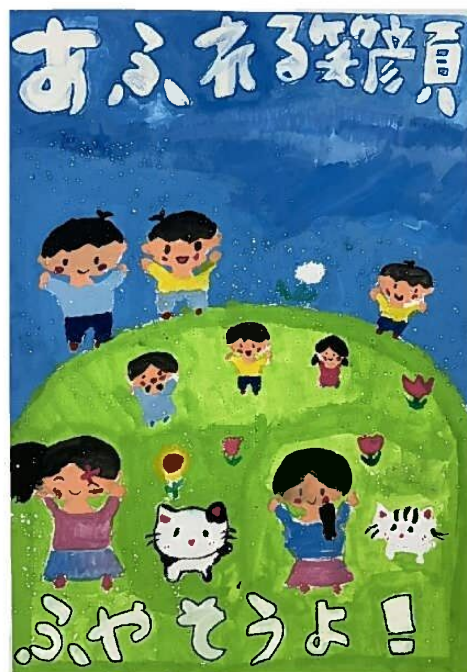
4年生



4年生



4年生



4年生



6年生



5年生



5年生



6年生



6年生

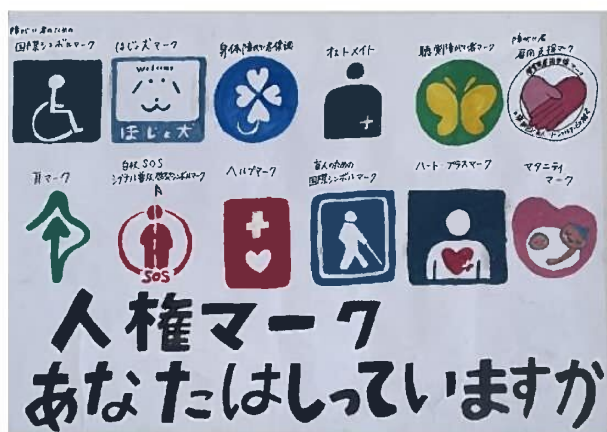


2年生

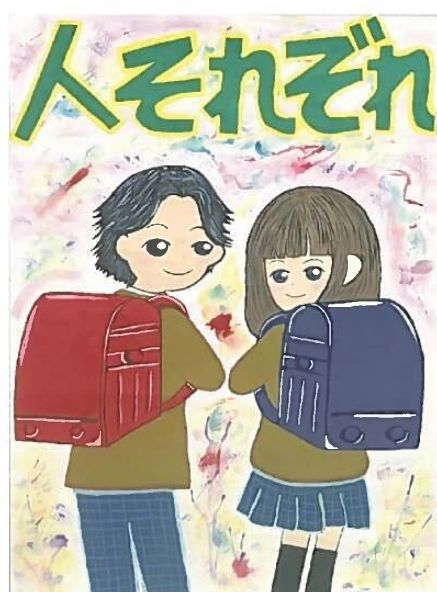
図画・ポスター 《中学生の部》



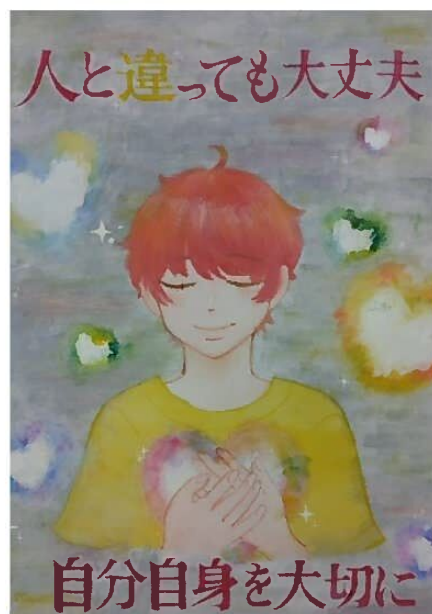
2年生



2年生



3年生



2年生

人権尊重都市宣言

すべての人々の人権が尊重される自由で平等な社会の実現は全世界共通の願いである。

しかしながら、現実の社会生活においては人権が侵害される事象が依然として存在しており、これを解消することは私たち全市民に課せられた責務である。

よって、当市議会は、あらゆる差別を撤廃し、すべての人々の人権が保障される明るく住みよい地域社会を実現するため、ここに人権尊重都市宣言を決議する。

平成 3 年 3 月 27 日

名張市



名張市子ども条例に基づく「ばりっ子会議」
考案キャラクター なばりん

—人権作品集—
2025年2月発行
名 張 市
名張市教育委員会
名張市人権啓発まちづくり事業推進会議

この冊子は再生紙を使用しています。